

【一葉の魅力②西日本唯一の漢方薬学科〈2〉 漢方薬は味のことも考えて組み合わせられた？学生らが「葛根湯」などを調剤】

2025/2/10 公開



第一薬科大学は西日本唯一の漢方薬学科がある大学です。2月10日の実習では、おなじみの「葛根湯」(かっこんとう)など2種類を調剤。漢方薬は味も考えて組み合わせられたのではないか？という説もあるそうで、学生たちは興味深そうに話を聞いていました。

薬学部5年の選択科目「伝統医療薬学実習」の一環。調剤した結果を、顆粒タイプの「漢方エキス製剤」と比較して漢方エキス製剤の簡便さや服用のしやすさを体感し、その有用性を理解してもらうことが目的だそうです。

担当の久保山友晴・准教授が最初に示したのが、不眠症などの際に使われる「黄連解毒湯」(おうれんげどくとう)。学生らは4種の生薬で作る一般的な黄連解毒湯と、そのうち生薬「オウゴン」を除いた湯剤(とうざい)を作りました。1種入れないだけで味がどう違うのかを知ってもらうためです。約50分、ぐつぐつと煮出しします。

その間、久保山准教授は使用した生薬について説明。学生らは生薬のかけらを食べ比べてみましたが、渋そうな表情。その後、煮出した2種類の湯剤を飲み比べました。思わず声をあげた学生もいたほど、飲みづらい湯剤らしいです。顆粒タイプの黄連解毒湯を使ってチョコレートやプリンなどを混ぜて比較したところ、チョコやコンソメスープが人気でした。「いま学会では『漢方薬は薬効だけでなく、味のことも考えて組み合わせられたのではないか？』という説まで出ています。薬剤師になった将来、今日学んだことも役立ててください」と、久保山准教授。

続いて「葛根湯」。生薬「カッコン」や「ケイヒ」など7種の生薬をお茶用のパックに入れて煮出しします。シナモン的一种・ケイヒの香りが広がってきました。そんな中、久保山准教授は生薬のほか、薬剤師の国家試験で出題される傾向も随所で説明。風邪の初期症状によく使われる葛根湯ですが、風邪薬についてこうも指摘しました。

「漢方的に考えると、『風邪薬を飲んで今日は頑張ろう』というのは間違い。『薬を飲んだら早く寝る』ことです。葛根湯には生薬「カンゾウ」なども入っていますが、こちらも味のことを考えて作られたのかもしれないね。